

# Optimal Monetary Policy and Inflation Persistence in an Open Economy

神戸大学大学院 井田 大輔

本稿は、ニューケインジアン<sup>2</sup>の2国<sup>2</sup>開放経済モデルにおいてインフレーションの持続性が存在する場合の最適金融政策を分析している。標準的なニューケインジアン・モデルにおいて、インフレ動学を説明する上で重要な役割を果たしているのはニューケインジアン・フィリップス曲線 (NKPC) である。しかしながら、標準的な NKPC はフォワード・ルッキングであり、バックワードな側面も金融政策分析を行うときには考慮すべきであると指摘されている。これまでのところ、バックワードなインフレーションの側面も考慮したニューケインジアンの金融政策分析は、閉鎖経済での議論がほとんどであり、開放経済の影響は考慮されていない。

そこで、本稿は、2国開放経済モデルにおいてインフレの持続性が両国に存在する場合の最適金融政策を分析している。具体的には、両国においてインフレの持続性が存在する場合に、両国は協調して金融政策を行う場合と協調せずに行う場合のどちらが厚生損失を低く抑えられるかを分析している。

本稿で得られた結果は、以下のとおりである。第1に、インフレがフォワード・ルッキングな時に自然利子率ショックが発生した場合、政策協調するか否かにかかわらずインフレはショックに対して大きく反応する。一方で、インフレが持続性を持つときには、自然利子率ショックに対してインフレはほとんど反応しない。第2に、コスト・プッシュショックが発生した場合、インフレは、経済がバックワードになるほどより持続的な反応をみせる。この結果は、政策協調するか否かに関らず観察される。最後に、インフレが高い持続性を持つ場合、両国が政策協調することからのゲインは大きくなる。すなわち、厚生損失は両国が政策協調する場合のほうが政策協調しない場合よりも小さくなる。しかしながら、インフレが持続性を持たなくなるほど、政策協調からのゲインは小さくなる。

キーワード： インフレの持続性、最適金融政策、政策協調